

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370693

研究課題名(和文) グローバル人材に求められる基礎技能養成の為に中大連携によるプログラムの実証的研究

研究課題名(英文) Demonstrative Research on Nurturing Basic Skills of Global Human Resources via Junior High School and University Collaboration in Japan

研究代表者

尾中 夏美 (Onaka, Natsumi)

岩手大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：50344627

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、グローバル人材能力育成のために日本国内で実施するプログラムに関して、次の2つの観点から分析を行った。English Campに参加した中学生の意識・態度の変化を測定し、この変化が英語母語話者留学生との交流の場合と様々な言語背景の留学生との交流の場合でどのような差異が生じるかを検証し、日本人大学生が留学生とEnglish Campを協働してプログラム企画・運営する時に、で述べたそれぞれの留学生とでどのような差異が生じるかを検証した。両グループにおいて英語学習意欲や異文化対応力等に向上が見られた。英語母語話者との交流に拘る必要性が低いことが検証できた。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research is to analyze a domestic program which serves to nurture skills required for global human resources (GHR), with regard to: 1) Validating the differences of awareness and attitudes between two junior high school student groups one attending an English Camp with interaction between "native" English speakers and Japanese university students; the other with interaction between international students of diverse language backgrounds and Japanese university students, 2) Validating the differences Japanese university students exhibit between the two cases described in 1) above, while collaboratively planning for and managing the English Camp.

This program sought to assist Japanese participants to improve their willingness to study English and cross-cultural awareness. This research concludes that there is no strong evidence that interaction with "native" English speakers is more effective than non-native speakers of English to nurture basic GHR skills.

研究分野：外国語としての英語教育、異文化理解教育

キーワード：English Camp 中大連携 グローバル人材育成 PBL 英語学習 コミュニケーション意欲 留学生との協働作業 異文化理解

### 1. 研究開始当初の背景

高等教育機関では、最近急激にグローバル化する社会のニーズに対応できる技能を持った「グローバル人材」(以下G人材)の輩出が求められている。G人材の資質については3つの要素に整理されている。要素：語学力・コミュニケーション能力、要素：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ(2012年6月4日グローバル人材育成推進会議)。日本政府はG人材の育成を加速させるために、高等教育機関に対して様々な競争的外部資金を用意し、大学でもこの社会的ニーズに応えるべく新規プログラムを数多く立ち上げている。内向き志向の若者が問題視される中、G人材の育成について「大学においては、個々の学生の留学意欲に任せるのではなく、その教育システムの中にG人材に求められる特性を促す何らかの仕掛けを仕組みとして組み込むことが求められる。」(佐藤邦明、2011)と、教育プログラムの工夫の重要性が指摘されている。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本人大学生のG人材能力や中学生においてはそのペースとなるG人材基礎力の育成プログラムを実証的に検証することを目的とした。日本人大学生が日本国内で留学生と協働作業をする過程で、現在その育成が喫緊の課題となっている「グローバル人材」に求められる能力のうち、具体的に伸ばせる能力や望ましいプログラムのあり方について検証・分析した。

日本では「英語ネイティブとの交流」を重要視する傾向が見られるが、このように拘ることが本当に合理的なのかということ、生徒・学生の気づきや態度について、条件を変えた2種類のイングリッシュ・キャンプの参加学生の変化を比較対照することによって結果に差異が生じるか、海外経験を持つことができない、あるいは関心の薄い大学生にとって、留学生と協働することにより英語による言語活動量が増加するこのようなプログラムへの参加が、次善の策になり得るかについても検証することを目的とした。

### 3. 研究の方法

この研究では、中学生を対象とした1泊2日のイングリッシュ・キャンプ事業を大学生が企画・運営することにより、事業に関わった日本人大学生と参加者である中学生にどのような変化が起こったかを、事前事後アンケート調査の結果の比較と観察を通して評価し、分析した。事業の準備期間を含め、すべて英語を使用言語とした。

プログラムは企画・運営する大学生が米国人留学生と日本人大学生である English Camp と、もう一方は多様な言語背景を持つ留学生と日本人大学生による Global

English Camp という組み合わせとし、11月から12月の時期に毎年1度ずつ English Camp と Global English Camp を実施した。参加大学生は留学生の属性以外は全く同じ構成で実施した。地域支援事業としてパイロットプログラムを2011年から開始していたので、English Camp の参加中学生の累計は87名で、本科研に採択されてから Global English Camp を2014年と2015年に追加実施しており合計38名が参加した。大学生の参加者は English Camp で59名、Global English Camp で23名である。

キャンプの実施までのスケジュールは、実施日約1か月前に参加大学生を招集し、初回と2週間前の中間報告会の2度、正式な打ち合わせ会を開催し、それ以外の本番までの準備期間は、参加大学生は4つの混合チームにおいて英語を媒介語として各々で準備を進めた。大学生らは中学生の英語テキストを参考にしながら、チーム毎に約1時間のセッションを2つずつ企画・運営担当した。各セッションにはゲームやダンス、スポーツ、歌など英語を使った様々な活動が計画された。Global English Camp では、これらに加えて参加留学生の母国の食や文化を反映したプログラムが企画された。

参加中学生は市内、沿岸部、県北から募集し、毎回約20名であった。研修は県内の研修施設を使用し、中学生対象の日本語での全体説明が終わると、翌日の終了会までは全て英語のみで過ごすこととした。本研修は宿泊を伴うため、4人から6人定員の居室には留学生、日本人大学生、所属や学年の違う中学生を同室にすることにより、異文化接触度を向上させる工夫をした。

留学生、大学生へのアンケートは初回のオリエンテーション時と終了時、中学生には研修の初日の説明会の時と終了時に実施した。大学生間のやりとりや中学生の参加の様子などの観察も行った。

### 4. 研究成果

まず、English Camp と Global English Camp それぞれの参加中学生に対しての事前事後アンケートの回答の分析結果と考察である。アンケートは5段階での回答と自由記述回答で構成した。全般的に言えることは、どちらのプログラムにおいても日常の同種の間関係を離れて「外国人」「大学生」「他中生(他の中学校所属の生徒)」という3つの“異文化”と接触したことにより、積極性が増したことである。English Camp と Global English Camp のどちらにも同程度のグローバル人材基礎力といえるコミュニケーションを楽しく感じる、異文化の人たちに対する不安や恐怖心の減少などが観察できた。このようなプログラムに参加を希望する生徒はもとも興味関心が高い可能性があるため、比較対象のために、参加中学生の所属中学校で過去にこのプログラムに参加経験のない一

般の生徒 530 人にも同様の項目でアンケート調査を行った。

まず図1は「英語でのコミュニケーションは楽しい」という文章に対しての意見である。事前と事後を比較するとどちらも同程度に「とてもそう思う」「少しそう思う」の回答数が増えており、肯定的になっていることがわかる。

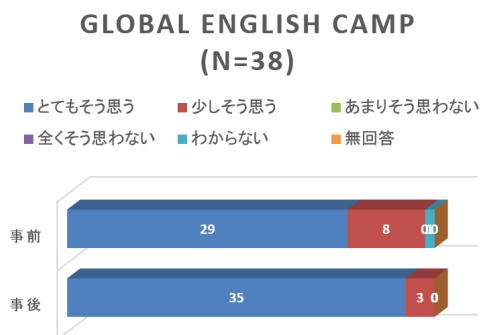
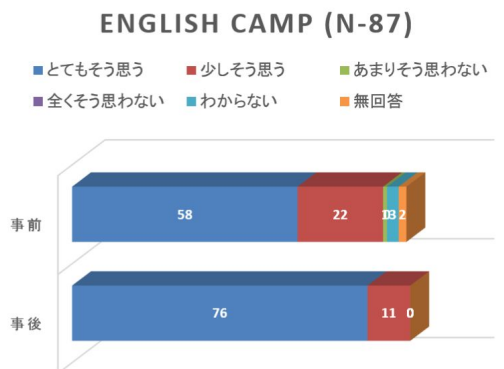


図1 英語コミュニケーション  
同じ質問に対して一般の生徒では「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した割合が65%であった。

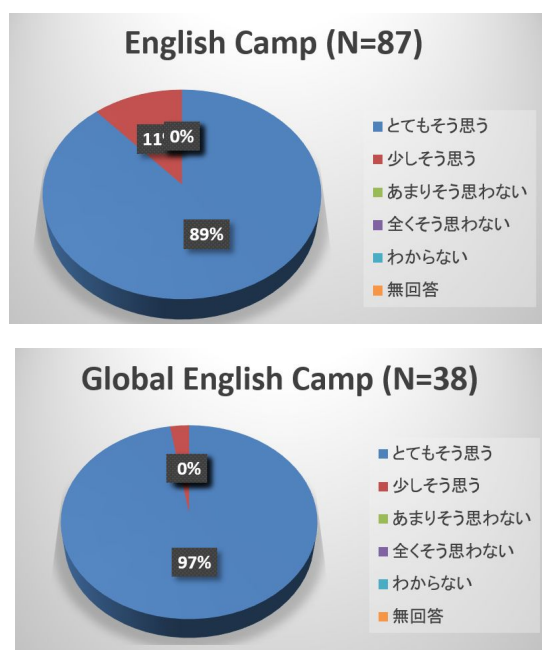


図2 英語学習への意欲

次に、重要な英語の学習意欲については、もっと英語を勉強しようと思うかどうかという問いに対して図2のように全員が意欲の向上を見せるという結果になった。これは、試験の点数のためといった間接的な動機づけではなく、英語を使えることで何が可能になるか、どのような楽しさが得られるかといった、具体的かつ直接的な体験をしたことによる変化と考えられる。

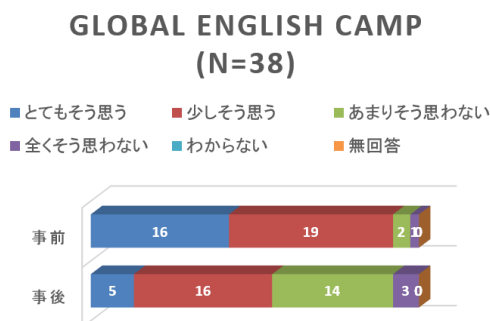
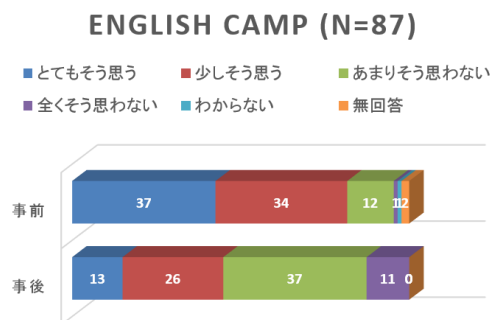


図3 外国人に対する緊張度

異文化との交流に対して肯定的な態度を醸成するためには、人間同士の触れ合いや共通点の発見など、個人レベルでの接触が大変重要である。「もし外国人が自分に近づいてきたら、緊張してドキドキする。」という文に対して「とてもそう思う」が両方のプログラムで事後アンケートの回答では半分以下に減少した。寝食を共にしながら密度の濃い交流をすることで、拒否する気持ちが薄れたといえる。一般の中学生では、外国人と会ったり個人的に話したりしたことがあるかどうかの問いに対して、「1回くらい」、あるいは「全くない」と回答した生徒が71%に上った。また、同じような質問を234人の県内高校に所属する1、2年生にしたところ、47%が同様の回答であった。英語指導助手などを通して、学校現場でも接触の機会を作る努力はされているものの、生徒が個人的な接触と認識するまでには至っていないのではないだろうか。

次に、記述の中に、「大学生のように英語が使えるようにさらに英語を勉強したい」という感想が見られた。日本人大学生は決して英語が堪能ではないが、一生懸命話している姿や、留学生と英語で会話しながら談笑して

いる姿を見て、触発されたようである。大学生がロールモデルとして認識された事例と言えよう。

「ちょっと勇気があれば誰とでもコミュニケーションが図れる。」「『外国人』『英語』に恐怖心があったが今は楽しいと思う。」「文法にとらわれずコミュニケーションしようとするのが大切だ。」「英語が通じた瞬間が嬉しくて絶対忘れない。」といった感想から、グローバル人材能力の中のコミュニケーション能力の向上や意識化が起こったとみられる。これらは English Camp と Global English Camp において異口同音に述べられているが、Global English Camp ではさらに「色々な言語を話す人とコミュニケーションが取れる。」というように、リンガフランクとしての英語の役割の気づきにも繋がっている。

次に英語での企画・運営を留学生との協働作業で行った大学生からの感想である。積極性の向上、柔軟であることの重要性の認識などが挙げられた。また、「分からないことは早い段階で質問するなどして解決しておくことが重要」というコメントは、英語で言われたことをなんとなくの理解で流していたことによる失敗から学んだ教訓のようである。これらに加えて Global English Camp 参加者からは、慣れない英語のアクセントに戸惑ったが、その経験から自分にも同様の課題があることに気づき、自分の発音やコミュニケーション力を向上させたいと思ったとの感想もあった。

留学生との協働作業は単なる言語の問題ではない。早口の英語で捲し立てられ、自己主張することができなくなった学生は「自分のアイデンティティーが崩壊するような思いだった」と話した。わからないならわからないというべきであったが、「空気を読む」という人間関係に慣れすぎているためか、彼にはそれができなかつたようである。この学生はその後別の機会を見つけて英語で自己主張できる積極性を身につける努力をしていた。

本研究の成果としては、以下の点が挙げられる。

(1) 大学生が英語を使って留学生との協働作業により主体的に企画・運営することによる教育効果。単なる「交流」ではなく、達成すべきゴールがあり、そのために様々な困難を乗り越えるということが、教育的意義を持っており、国際共修の実践モデルとなった。

(2) 中学生、大学生両方にとって、Global English Camp で多様な英語に触れられる機会を提供することの意義の確認。

日本の日常生活では英語を本当に必要とするシーンはかなり限定的である。加えて、グローバル化する国際社会では、英語母語話者との協働より英語非母語話者との協働の場面の方が多であろうことは容易に想像できる。今回研究対象とした Global English

Camp のような多文化要素を勘案した協働作業型事業はグローバル人材育成に貢献具体例と言えよう。

(3) 海外研修に行けない学生にとっての改善の策になるかという件に関しては、これがそのまま代替プログラムとして十分であるということではなく、このような事業への参加をきっかけとしてさらに別の機会を積極的に探し、技能を磨いていく動機づけとなることが検証できた。また、高校生になっても外国人との交流・接触経験が全くない生徒が半数に上ることから、G人材基礎力向上の観点からも、このような機会を幅広く提供していく必要がある。

今後の課題としては、Global English Camp の参加者のプロフィールの変化がどのような学びに繋がるか、さらに研究を進めたい。

<引用文献>

佐藤 邦明、「グローバル人材育成の目指すべき姿」、日本貿易会月報 2011 年 9 月号、33-36

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

尾中 夏美、Influences on Willingness to Communicate and Motivation to Study at English Camp、第 42 回全国英語教育学会埼玉研究大会発表予稿集、pp.134-135

尾中 夏美、留学生との協働作業経験を通じた日本人大学生の学び 楽しい国際交流から異文化交流のための気づきへ、2016 年度異文化間教育学会第 37 回大会発表抄録、pp.114-115

尾中 夏美、英語によるコミュニケーション意欲の醸成 中大連携事業の例から、第 41 回全国英語教育学会熊本研究大会発表予稿集、pp.362-363

尾中 夏美、留学生と日本人学生の協働作業を通じた異文化理解と地域貢献 イングリッシュ・キャンプ事業の実践を通して、異文化間教育学会第 36 回大会発表抄録、pp.188-189

[学会発表](計 6 件)

尾中 夏美、Influences on Willingness to Communicate and Motivation to Study at English Camp、全国英語教育学会第 42 回埼玉研究大会、2016 年 8 月 20 日、獨協大学(埼玉県草加市)

尾中 夏美、English Language Immersion Camp to Motivate Study and Improve Language Skills、TESOL Indonesia International Conference、2016 年 8 月 11 日、Lombok (Indonesia)

尾中 夏美、留学生との協働作業経験を通

じた日本人大学生の学び 楽しい国際交流から異文化交流のための気づき、異文化間教育学会第37回大会、2016年6月5日、桜美林大学(東京都町田市)

尾中 夏美、英語によるコミュニケーション意欲の醸成 中大連携事業の例から、第41回全国英語教育学会熊本研究大会、2015年8月23日、熊本学園大学(熊本県熊本市)

尾中 夏美、留学生と日本人学生の協働作業を通じた異文化理解と地域貢献 イングリッシュ・キャンプ事業の実践を通して、異文化間教育学会第36回大会、2015年6月6日、7日、千葉大学(千葉県千葉市)

尾中 夏美、アンドリュー・ムーア、海外協定校との体験研修プログラムの構築、NAFSA 2015 Annual Conference & Expo、2015年5月27日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾中 夏美 (ONAKA, Natsumi)

岩手大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：50344627